

メールレター(32)

オタワ訪問

少し寒いほどの初秋です。窓辺に毎朝やってくる雀たちも、冬に備えたくさん食べて、脂肪を蓄えはじめているのか、ゴムまりのようにコロコロになって飛んできます。早いもので、今年も3分の2が過ぎてしまいました。

「高円宮妃殿下カナダ訪問のランチに招待されたんだけど、高円宮妃殿下ってアニメのお姫様？」

ドリトル先生の何気ない質問にマダム田中はちょっとぎょっとし、

「高貴な、素敵なお皇室の妃殿下ですよ。古風な名前かもしれないわね。アニメの姫ではありません。」

というわけで、某日に、オタワにあるカナダ最高裁判所で催されるランチに出席すべく、オタワに向かうドリトル先生にマダム田中は同行することにしました。(ただし、招待はドリトル先生のみ)何故、最高裁判所で、首席判事が皇室の接待にあたるのか疑問が多々ありました。何のことはありません、この日は、フランスで行われている G7の真っ只中だったため、政府関係者は、あのイケメンのツルドー首相を始め、総勢フランスに行ってしまう、留守だったようです。

オタワはカナダの首都。国会を始め、カナダの全ての政治がここで行われます。ゴシック様式の国会議事堂を始め、イギリス風の建築様式の、厳かで美しい政府の各専門機関の建物が立ち並んでいます。建物は幾何学的な直線のみで構成されていて、「オーブリテイッシュ、」と思わず叫んで硬直しそうな威圧感があります。フランスのルネッサンス様式の優雅さや柔らかなお城の雰囲気とはだいぶ異なります。

フランス風とイギリス風を見分けるのは簡単で、フランス風は窓枠の上の方が丸くなっていて、イギリス風は四角(縦の長四角)なっています。モントリオールにはイギリス風があったりフランス風があったりして、歴史の流れを感じるのですが、イギリスの植民下に作られたこの街は四角ばかりです。ここで、あのイギリス風のまずい食事とスコーンのアフタヌーンティーをするのかなあと思わずため息が出てしまいます。

オタワでは食事は美味しいと感激できるものがみつからなかったのですが、例外なく美味しいコーヒーが飲めました。この町で驚くのは徹底した、英語とフランス語のバイリンガリズムです。政府関係の仕事が大半を占めるせいもあるのかもしれませんが、英語もフランス語も完璧にできないと良いポジションにつけないようです。

遠くに国会議事堂の建物をみながら、この街の中心を流れる洒落たリドー運河が、ゆったりとオタワ河に流れ込んでいます。全てが青い空に溶け込み、一枚の絵のようです。地理的には、オタワ河を挟んでケベック州とオンタリオ州に分かれます。

アールデコの洒落た建物の最高裁判所の昼食会に参加したドリトル先生は、歴代の駐日カナダ大使とテーブルに着く、高円宮妃殿下にほど近いテーブル案内され、他の二人の女性招待客に囲まれ素敵な時を過ごしました。気品と威厳に溢れる妃殿下のスピーチの後、食事となりました。美味しい食事と共に出されたのは、一本はバンクーバーのワイン、一本はナイヤガラ(トロント)のワイン、一本はケベックのワインの、カナダを代表する3種のワインでした。

この昼食会の間中、ドリトル先生の気を引いたのは、黄色のスーツを着た美しい妃殿下の頭にちょこっとのっている黄色い帽子でした。子供の頃、教会に行く女性たちは、皆、帽子を被っていたものでしたが、今や帽子を被る女性を目にすることはなく、まして正式な食事の間も被っている女性は妃殿下のみです。

「どうして妃殿下は帽子を被っていらっしゃるのでしょうか。」

隣のカナダの芸術協会の責任者の女性にドリトル先生は尋ねてみました。

「帽子の下の髪の毛みせたくないとか？」

「正式な席では王冠をつけるのだそうですが、大事な正式な食事会ではありませんから、帽子なのです。」

そう、答えたのはもう一方に座る大学教授でした。

おっとと、お二人さん、聞いたところでは、皇室の姫君が王冠をつけるのは極めて大事な正式な行事で、男性は燕尾服を着ている時だそうです。タキシードを男性が来ている場合や昼間の行事などは姫君たちは帽子を被るのだそうです。日本の皇室の服装はイギリス風の王室の服装を明治以来取り入れているようです。女性は、エリザベス女王の服装、そのままです。なかなか格式が高く、美味しい食事と共に、心身共に引き締まる時が流れていったようです。

きっかり2時間で席を立たれた妃殿下の後追いで、ホテルに戻ったドリトル先生は、行く手に出口が見えない、継ぎ接ぎだらけのオタワの街の構造にやや苛立ち、(こんな不合理な町の作りで、良くまともな政治ができるものです。)ぐるぐる同じ道を回りながら、モンリオールへと帰途のハンドをとったのでした。帰り道はずーっと帽子の話でした。あーよくしゃべること。